

## 第17回「人と自然：環境思想セミナー」

- テーマ 掌に握りしめた雪のように——折口信夫と近代のゆくえ
- 講師 安藤 礼二氏（多摩美術大学准教授）
- 日時 2008年12月22日（月） 15:00～17:00
- 場所 総合地球環境学研究所（地球研） 講演室
- 申込不要／聴講無料
- 主催 地球研・文明環境史プログラム  
プロジェクト「農業が環境を破壊するとき」（リーダー：佐藤洋一郎・地球研教授）

### ■講師略歴 安藤 礼二 ANDO Reiji

1967年東京生まれ。文芸評論家。早稲田大学第一文学部考古学専修卒業。現在、多摩美術大学美術学部芸術学科准教授、同芸術人類学研究所所員。2002年、「神々の闘争—折口信夫論」で『群像』新入文学賞評論部門優秀作受賞。2006年、『神々の闘争 折口信夫論』（講談社、2004）で芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。その他、著書に『近代論 危機の時代のアルシーヴ』（NTT出版、2008）、『光の曼陀羅 日本文学論』（講談社、2008）、編著書に『初稿・死者の書 折口信夫』（国書刊行会、2004）などがある。

### ■概略

降ってきた雪を握りしめると、雪は掌のなかで溶けて水となって消えてしまう。掌に残るのは雪の冷たさだけだ。実体は何もないが、それゆえに際立つ雪の冷たさ、そして清らかさ。

あたかも掌に握りしめた雪のように——亡くなる直前の折口信夫（1887-1953）は、日本の短歌、ひいては日本文化をそんなイメージに託した。内容は何も残らないが、ある思いだけは残る。これほどの確で、しかも诗情あふれた日本文化イメージはないと絶賛し、この一節を筆者に教えてくれたのは、以前本セミナーでも発表いただいた花人の川瀬敏郎氏だった。自分の花もまたそうだ、内容なんて何もない、と。それ以来、折口信夫という名前がずっと頭にひっかかっていた。

折口のいう何もなさとはいったいなんなのだろうか。何もないことに注目したのか、あるいは何もないが思いは残るということに注目したのか。もちろん後者なのだろうけれども、そうだとすると、残る思いとは何なのか。そこに意味はあるのか。

いずれにせよ、これは相手ごわい。言うまでもなく、少なくとも現代のわれわれにとって、ひとたび何かに取り組んだとしたら、内容はあって当然だし、意味のあるものを求める。求められる。環境問題などにたずさわっていたらなおさらだ。なくなるのではなく残すこと、壊すことではなく保全すること。ベクトルはいつもそっちを向いている。

折口の発想はそれとはまるで反対を志向している。同じく死の直前にとりくまれた「自歌自註」では、「内容空虚で、空気菓子をしやぶるやうな処」という言い方もしている。無内容、空虚、無意味、虚無……。そんな折口の本質に注目し、独自の近代日本論を展開しているのが、文芸評論家の安藤礼二氏であ

る。安藤氏とともに、折口の短歌論・日本文化論を通して、いまわれわれが本当に残さなければならぬものは何なのか考えていきたいと思います。

■本年の環境思想セミナーはこれが最終回ですが、来年以降も継続する予定です。詳細が固まり次第告知いたします。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

---

■お問い合わせ

環境思想セミナー企画担当 鞍田 崇

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

総合地球環境学研究所 研究部 研究員(哲学専攻)

<http://www.chikyu.ac.jp/sato-project/>

[kurata@chikyu.ac.jp](mailto:kurata@chikyu.ac.jp)

office: 075-707-2382 fax. 075-707-2508